

蔬菜園の設計とねらい所

中原 忠夫



早生甘藍とトマトの間作圃場

昨年の冷害は大正二年以来のものといわれ、水田農家は勿論畑作農家の被害は全くみじめなものだった。確かに夏季の温度が低くて日照も少なかったから冷害は止むを得ない天災といえるかも知れない。しかしながら、その中にも立派な作や収入を得ている人がいた。結局これらの人達は経営、技術が冷害に打勝った結果だと思ふ。

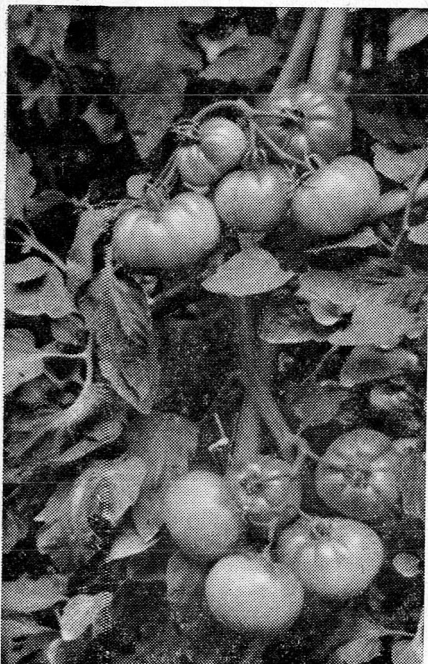
蔬菜農家も御多聞に漏れず収入の方もピンからキリまであった様だが概してめぐま

れば他の作物より有利に売れるという安易な考えから、作付が増え、たまたま好天に恵まれたために極く品質の良いものしか商人が引取らず、育苗費も生み出せなかつた農家が多かつた。当然本年も作付は伸びるものと見なければならぬので、土壤管理は勿論、適地適作の上にプラスされた技術によつて品質の良いものを生産することが何といつても大切である。むしろ反別を伸すより肥培管理を集約化するといふか、

反別当りの手間を多くかけても品質の良いものを探つた方が単価を良くして、反収も手間当りの収益も増加することになる。

二 病害虫対策を充分樹ておくこと

昨年は蔬菜の一つ一つを探りあげて見ても、例年より多くの病害虫が発生した。恐らく昨年のような気候条件では却々完全防除は難かしく多少の差こそあれ各園とも被害を見受けられた。従つて秋季圃場の清潔を励行したとしても、圃場には相当病害虫の根源が残つていると見なければならぬ。単に病害虫が発生してから薬剤による防除をするというのでなく、事前に計画的防除を行わねばならない。



健全な生育を示す福寿二号

れた方であろう。蔬菜のように生産量によつて価格の変動の激しいものは、昨年のような場合高価格を維持して収量の減を価格でカバー出来たからである。

昨年のような冷害は度々訪れるものではないと思ふが、今年度の計画を樹てるに当つては昨年の経験を生かして考へて行かなければならない。先ず第一に

一 品質の良いものを作る事

一 昨年もそうだったが、一昨々年は価格が良かつたため、野菜は作れば他の作物より有利に売れるという安易な考えから、作付が増え、たまたま好天に恵まれたために極く品質の良いものしか商人が引取らず、育苗費も生み出せなかつた農家が多かつた。当然本年も作付は伸びるものと見なければならぬので、土壤管理は勿論、適地適作の上にプラスされた技術によつて品質の良いものを生産することが何といつても大切である。むしろ反別を伸すより肥培管理を集約化するといふか、

先ず床土の安全度は何うであろうか。近年は胡瓜の炭疽病、黒星病の被害が増えているが苗床での発病、感染度は高いもの様である。更に厄介な十字科の根瘤病にして見ても苗床での初期感染は圃場での罹病より被害が甚しいだけ恐しいものであることは御承知の事と思ふ。所で床土は既に準備されているわけだが、秋のうち

に消毒が済んでおれば問題ないが、春先行うとすれば、

クロールピクリンは効果的だが温度が低い事と処理後薬が抜けるまでにかなり日数を要するので行い難い。

かような場合はウスブルンの八〇〇〜一〇〇〇倍液を播種後坪当り

三升〜五升位灌水するとよい。この際一度灌水して充分床に湿りを与えてからウスブルン液を灌水するようにすると、ウスブルンが表層だけに吸着されることなく下層まで消毒することが出来る。特に心配の場合は灌水の都度、前記割合で灌水しても差支えない。

(四) 苗床での防除を完全にして健全苗を育てるようになる。立枯病は播種時ウスブルンを灌水して置き、移植床でも温度、湿度管理を適当にする大して問題はないが、低温、湿潤、密生の場合に出易く大害をあたえるものである。発生した場合は罹病苗を抜き処分して、附近にウスブルンを灌水するか、硫黄華を撒布して土と混和すると防ぐ事が出来る。更に瓜類やトマト等の疫病や炭疽を防ぐために一〜二度ダイセンか水銀ボルドーを撒布する事が必要である。なお五月中旬頃になると羽を持つアブラムシが床内に見られるのでバイラスの防除のためにもロテゾールをかけるが良い。

定植後苗が活着するまで多少の植傷みが生じ、病害に対して弱い状態に暫くなるも

のであるから定植前は尿素の葉面撒布をか
ねて、ダイセンや水銀ボルドーを充分撒布
して置くが良い。

(イ) 手竹の防除、年々新しい手竹を使用
することは困難であるから、一度使用した
ものは完全に消毒して、更に同一の作物に
連続使用することのないようにすべきであ
る。手竹の消毒法にはいろいろあるが、ピ
ニールを覆つてクロールピクリンで燻蒸す



疫病のため惨状を呈したトマトの圃場

が、瓜類のべト病、炭疽病、トマトの疫病
等は発病し始めたなら簡単に抑える事が出
来るものではない。結局事前に或る程度抑
えて行くより仕方がない。防除ではなく計
画的に予防対策を立てる必要があるわけ
である。一般には六月には十日に一度、七月
以降八月一ぱいは一週間に一度位を目標と
して薬剤撒布層を作つて置くようにする。
なお七月以降になると降雨の直前直後、気

温の急
上昇し
た場合
等は良
く注意
して、
発生の
おそれ
がある
と計画
に関り
なく撒
布する
位にす
る。

るものも良いであろうし、ウスプルン、ボ
ルドーの相当濃度の高い薬液を充分灌注す
るのも良い。唯クロールピクリンは人体に
毒性が強く、温度が低いと効果がうすい上
に、消毒期間は二三日位が良いが完全に
臭気を抜いてからでない和使用出来ないか
ら注意を要する。

二 圃場の防除対策、黒星やウドンコ、
バイラス等のように局部的に発生を見るも
のはあまり拡がらないうちに処置出来る

最近の新農薬が多数出てかなり効果的
なものもあるが、結局は絶えず葉面を薬液の
膜で保護して置くという考えから、高価な
新薬にのみ頼つて行く方法は有利でない。
瓜類には石灰ボルドーは葉を硬化するから
好ましくないが、六斗式位なら大して害は
なく、トマトでも五〜六斗式のものを用い
ても充分効果がある。唯瓜類の炭疽病には
効果が少いのでウスプルン液とかダイセン
を適時使用すると良い。またトマトの疫病

も水銀ボルドーが最も効果的でダイセンが
これに次いでいるので、病害の発生を見た
場合や、病害の発生の止らない場合にはこ
れらのものを組入れるようにして、大体は
石灰ボルドーを主体にして撒布するのが良
い。

薬剤撒布は飽くまで予防を第一とし、適
時に圃場一面に撒布する必要があるのでは
何としても、能力の良い動力噴霧器の設備が
望ましい。これを設備することにより防除
が徹底出来るばかりでなく労力の節減にも
極めて効果的である。

三 販売を上手にすること

昔から作り上手より売り上手という言葉
があるように、売り方によつて同じ品質の
ものでも価格に相当な開きの出来るもので
ある。土地の市場や業者の実態、品物の消
流を研究してかかる事が必要で、札幌の例
では現在の処大きな市場がない関係上、力
のある販売量の多い特定業者に出荷して
いる方が有利のように見受けられる。

最近是一般消費者も栄養面から生鮮野菜
に対する認識も高まつて来ているので荷姿
等にも一考を要する問題であろう。東京や
大阪市場に送られる人参が、時期的関係も
あろうが泥付のままのためにかなり価格の
面でたたかれていますと聞いています。このよ
うに根ものでも土つきのままでは売行に影
響するものと考えられる。ホーレン草のよ
うに鮮度の要求されるものでは抜き取り結東
に注意するとともに日持を良くするために
出荷二日前位に尿素の葉面撒布等を行う事
も大切な技術である。更にトマト等の色付

と鮮度を要求されるものは色付の状態を良
く見て採取して玉揃、品質を吟味して出荷
する等、買う身になつて野菜を取扱う事は
とりもなおさず売る方上手の技術といえよ
う。

四 品種を誤らぬこと

いつも繰返す言葉なのだが、要は府県の
優秀品種が必ずしもこちらで優秀な成績を
示すとは限らないし、旭川と札幌にても差
がありうるわけであるから、品種を選択する
には地力の関係、技術労力の程度、出荷の
方法を考慮に入れ更に市場の嗜好の傾向も
無視してはならない。

北海道の場合果菜類では早生であること
が必須条件で、必ずしも早生種と耐冷性と
は一致しない。最近府県で促成種の改良が
進んでいるが、こちらの露地ではいずれも
好成绩を挙げていないようである。トマト
では福寿系が先ず無難であろう。唯最近大
果種に注目して栽培を競つているようであ
るが、百匁近くの大きさのものになると取
量は多いかも知れぬが、大衆性という点か
ら見るとマイナスのように考えられる。世
界一や栗原等の大果種は地力と肥培を考慮
に入れた栽培をしないと品質を損ねるばか
りでなく、大型福寿等でも育苗を合理的に
しないと、奇型果が出て困ることになる。

地場消費地帯ならトマトは勿論胡瓜でも
育苗期を早めるより、多少熟期が遅くとも
樹勢の旺盛な品種を(耐病性)何割か取入
れて、秋遅くまで出荷するのも一つの方法
であろう。(雪印種苗・上野幌育種場園芸
作物主任)